
習字のお時間！！！！

クラウディア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

習字のお時間！！！！

【Nコード】

N8943B

【作者名】

クラウディア

【あらすじ】

コナンと灰原は学校の習字コンクールに出す代表に選ばれてしまう。しかし習字がにがてな灰原は・・・？！ コ×哀です

第1話 代表

「はいではみなさん今配った紙に今度の習字コンクールに出る代表の人にふさわしいと思った人を書いてください」

そしてその紙は灰原のところにまわって来た。

（習字コンクールなんてあるのね・・・よかったわ、全員じゃなくて。そうね・・・適当に円谷君でいいかしら・・・こういう事好きそうだし）

そして灰原は白い何も書いてない紙に『円谷 光彦』と書いた。

そして7分と48秒後・・・

「はい、では一番投票が多かった2人を発表します。えーまず一人目 江戸川コナン君16票よ！」

「えっ、俺!？」

工藤君は「何で俺なんだよ・・・」って小声で言っていたけど、満更でもない顔をしている。

そうよね、小学1年生の習字として出すんだから無敵よね。それとも習字が得意だったりするのかしら？

「そしてもう一人は・・・」

ここまでくれば読者の方々は分かってしまっているでしょう・・・

「灰原 哀さん！！！灰原さんにはなんと20票も入ってるのよ！」
小林先生はニコニコして私に笑いかけた。

「よかったわね。灰原さん！じゃあ、代表者はこの二人で決定です！」

「ちよつ、ちよつと待つてください！小林先生！！！」

私は周りの目も気にせずイスから立ち上がった。

何が『よかったね！』よ！

全然よくないわ！！！！

よりもよって何で私なの？何で20票も入ってるの？！私は普段学校では目立たなくしてるし、別に習字がうまいって言われた事もないし、それに工藤君と違って音楽の時間リコーダーだってちゃんと吹けてたわ！！！！

リコーダーは関係ないわね・・・

「あら、習字が嫌なの？それともパートナーとして江戸川君が嫌なの？先生が見たところいつも一緒にいるし、二人はすごく仲がいいように見えたけど・・・もしかしたら二人が付き合ってるんじゃないかと思うほどね」

「いつ、いえ絶対そんなんじゃないありません!!!!!!」

先生に言われて私の顔がは少し赤くなった。

でもむきになって否定してしまったのはもつと恥ずかしい・・・

「あっ・・・」

周りを見ると、みんながびっくりして私を見つめていた。そうよね、先生のただの冗談に大声出してこんなに否定して・・・穴があったら隠りたいとはまさにこの事ね・・・。

でもやっぱり1番気になるのは彼、彼はどんな顔をしてるのかしら・・・

第1・5話 道

やっぱり……

「灰……原?……」

彼、工藤君は私見つめて驚いていた。

でも、小林先生が言った事は別に気にしてないみたい……
きっと工藤君の中の私のイメージが冷静とかネガティブ、何考えてるかわからないやつ、とかでしょうから今の私の行動が理解できないのね。

私だって今の自分の行動が理解できないわ……

もし、付き合ってるみたいと言われたのが工藤君じゃなく円谷君や小島君だったら、私はこんなふうにはなかったと思う、多分そうだったのは……彼だったから……

認めたくないけど……

そうね、相手が工藤君だからだわ……

く 帰り道く

私は吉田さん達と別れて工藤君と二人で歩いていた。

いつも工藤君と二人だけになってしまう時、
何も喋らずただ歩くだけの場所……

たまに話をしたり、少し気まづくなったりするところ

だけど、今までにこんなに気まづくなつた時つてあつたかしら・・・
それとも、気まづいと感じているのは私だけの・・・私の気のせい
なのかしら

そうであつてほしい

「あつ、あのさあ・・・灰原・・・」

工藤君は急に話をきり出し止つた。

工藤君もやつぱり気まづいと感じているのかしら？・・・

当然私も歩くのを止めて振り返つた。

そしたら、彼は私のすぐ傍にいて、突然私の額に手をあてた。

「ひゃつ／＼／＼・・・なつ何・・・／＼／＼／」

突然の出来事で私は何かなんだかわからなかつたわ・・・
だつて本当に突然だつたんだもの・・・

「あつ、いや熱があるんじゃないかと思って・・・」
・・・ねっ熱！？

「お前今日変だつたから・・・お前、やつぱ熱がある・・・」

そう言つて彼は私の額からやつと手を離してくれた。

「そつ、そつ・・・」

何か答えとしかは違ふ気もするけど・・・

私は一旦深呼吸をしてそう答えた。

けど、熱があるなんて全然そんな感じはしなかったけど・・・
もしかして彼のせいだったり・・・／／／／

く後書きのような本文く

それから私は工藤君に博士の家まで送ってもらった。

本当はその時、いろいろあったけど・・・

作者曰くそんな事を書いてるといつまでたっても習字の話にいかないから・・・

だそうよ・・・タイトルを『習字のお時間』なんて名前にしてしま
ったから、しかたないわね・・・

第1・5話 道（後書き）

一応設定上は灰原は習字苦手って事にしてるけど、本当はすごく上手そうですよね。

第2話 海

カシャカシャカシャ

キーボードを叩く音がする。

ここは地下室。地下室・・・いい響きね。まさに私にぴったりの場所だわ

私は普段ここで解毒剤の研究をしているの、そして今日も・・・データがないからたいして進まないけど、

「はっ・・・くしゅん」

博士には一応寝てくるって言ってきたけど、今は寝るのは嫌、どうしてもあれの事を考えちゃう。

そう、それはたかが学校の行事でありながら私をこんなにも困らせるもの・・・

アメリカ暮らしだった私が出る訳ないじゃない！・・・と叫びたくなるもの

それは・・・私はパソコンの横に置いてある一冊の本に目をつけた。

『初めてのお習字

～幼児でも出来る～』

「はあ、どうしようかしら・・・」

この本嘘つきだわ、幼児でも出来るって書いてあるけど、全然出来

ないじゃない。

実は昨日の夜灰原は一人でこっそり書いてみたのだ。

『コンコン』

ドアのノックする音がして振り返るとそこには工藤君が居た。

「よう、灰原、風邪大丈夫か？」

すでにドアは開いていて、いつの間にか工藤君はもう部屋の中に入っていた。

「ええ、だいじょ・・・はっ・・・くしゅん」

大丈夫と言いながらくしゃみをする私。

「ホントか？」

「ええ、多少せきやくしゃみくらいで熱も平熱だし、それにもう私2日も寝てるわ・・・大丈夫よ」

別に強がりじゃないわよ。本当にもう平気なのよ。

「そっか、よかった。ちょっと上来てみるよ」

工藤君に言われるまま1階に行くとテーブルの上には習字道具がずらりと並んでいた。

「じっ、これ・・・」

「小林先生と一緒にやれっていったからさ」

「そう、なの……」

「ほら、さっさと終わらせようぜ」

工藤君はテーブルの向こう側に座って書き始めた。
私も座って、その道具達を見つめる。

「ん？どうしたんだよ？書かないのか？」

「えっ……かつ、書くわよ」

私はそう言って恐る恐る筆を持った。

そして紙を取り出す。

よし……書くわよ……

がんばるのよ志保！

『ポタ』

あまりにも長く紙の上で筆を持っていたので、墨のしずくが落ちてしまった。

「あっ……」

とつさに工藤君を覗き見る。

よかった気づいてないわ。

私はひとまず筆を置いて紙を取り替えた。

よし、今度こそ……

『べちゃ』

何かすごく嫌な音がしたんだけど・・・

やっぱり・・・

私が筆を退けると、習字紙でろ過でもするようなほど墨がついていた。

墨をつける量を間違えたのね・・・

私はまた紙を取り替えて習字を続ける。

大丈夫、墨はさつきよりだいぶ少ないわ・・・

『かさつ』

・・・
・・・
・・・

少し筆を動かしてみる。

『カタ、カサ、カタ、カサ』

・・・

普通習字でこんな音しないわよね。

それでも私はなんとか書き上げた。

「でき、た・・・」

書いた文字は『海』・・・のはず

海よね・・・確かに左側に三水っばいがあるし

海・・・なんでしょうね・・・

「はあ・・・」

私が諦めてまた次の紙を取ろうとしたその時、私は1番見たくないものを見てしまったの。

私の書いた習字を見て哑然としている工藤君。

「これ・・・本当に前が書いたんだよな・・・？」
もちろん最後には？がついていた。

「そつ、そうだけど・・・悪い？」

「いや、悪かねーけどよ・・・これは・・・ちょっと予想外だな」

「・・・でしょうね・・・」

どうしようかしら、いい訳でもしようかしら？習字なんてやった事ないから出来ないって・・・

「ちょっと貸せよ」

工藤君は私の習字紙を手を持った。
何をするのかと思ったら彼は・・・

「くっ・・・ハッハッハッハッハッ！」

ひどいでしょ？いきなり笑いだしたのよ！

「ちょっと、返してよ！」

私はそれを無理やり返してもらった。

「けど・・・灰原が・・・ハッハッハッ、」

「いい加減にしてよ！しかたないでしょ、習字なんてこれがやったの初めてなんだから！！！」

私が怒鳴ると工藤君は笑うのを止めた。さすがにこれはいけないと思っただのかしら。

「あつ悪い、ごめん怒るなよ、落ち着け、なつ、灰原？・・・」

「はあ・・・もういいわ・・・」

「しかしねえ・・・普通のシャーペンとかで書く、お前の字はうまいのに、何で習字だとかうなんだ？これは小学生以下だぜ、元太だって、もっとましなの書くと思うけどな・・・」

「はつきり言ってくれるのね・・・」

「あつ、まさか、まだ怒ってるなんて言わないよな。だってこれをコンクールに出すのは・・・」

「分かってるわよ・・・だから困ってるんじゃない」

「しゃーねえな・・・俺が教えてやつから」

「結構よ・・・余計なお世話だわ」

「おめーなあ・・・かわいくねえのもいい加減にしろよ・・・人が

せつかく教えてやるって言うてんだから・・・」

「・・・・・・・・」

「ほら、座れよ」

「・・・・・・・・」

「は・い・ば・ら」

「わかったわよ。座ればいんでしょう？」

私はまたさっきの場所に座った。

工藤君に教えてもらうのはいやじゃないけど・・・

教えてもらうって事は

やっぱり緊張しちゃう・・・

どれもこれも

習字のせいよ！！！

第3話 手紙

「なあ、お前って・・・本当に習字やった事ないんだな・・・」
工藤君は私が書いた作品をテーブルの上に並べていた。

「だから・・・そう言ったじゃない、何度も言わせないで」

「灰原の事だから、何度か練習すれば人並みにはなるんじゃないか
って思ってたんだけど・・・まあ、最初のこれからすると幾分まし
か・・・」

工藤君はそう言っているけど、私からしたら自分が書いたんじゃない
みたいにな上手く見えるわ。さすが私ね・・・

「これはこれで私はいいと思うけど」

「えっ、まさかお前、これをコンクールに出す気じゃ・・・」

「私は、そのつもりだけど・・・」

「はあ・・・あのさあ、お前は基本的な事が間違ってるんだよ。
たとえば書き順とか、筆の持ち方とか」

「それくらい自分でも分かってるわよ、けど何度直しても、気が付
いたらまたもとに戻ってしまうのよ」

そして私達の練習は1週間続いた

「えっと、次は・・・こうかしら・・・」

私は筆を思いっきり動かした。そんなに動かすつもりじゃなかったんだけど、これだけ力を入れれば紙からはみ出すのしかたないわね・・・

「だあー！！もう、何でそうなるんだよ！・・・」

工藤君は後ろから自分の手を私の手の上に重ねた。

「いいか？！まずはこうだろ？」

工藤君と私の手がゆっくりと動いていった。

彼は筆に夢中だけど、私は彼に夢中だった。言っとくけど、これは正常よ。今は小学生だけど本当は彼も高校生な訳だし、そうでなくても普通はこんなに近づいたら緊張する

「それで、次にこう・・・」

彼は・・・工藤君は、私とこんなに近づいていても何も感じないのね
当たり前と言えば当たり前、彼には彼女がいるのも、きつと彼の中で女性という存在は彼女だけなんでしょうね。

だから、私の事も、見えてない・・・私の気持ちもたぶん一生気づかない・・・

「よし、出来た！」

気が付いたらいつの間にか、きれいな『海』が出来上がっていた。
すごくきれいよ。だって私が書いたんじゃないもの、確かに私も一

緒に筆を動かしたけど、これは彼の作品

「うーん、俺からしたらいまいちだけど、もし灰原がこれくらい上手いのを書けたら上出来だな」

「そうね・・・それより、あなたここで彼女に手紙を書いてたんじゃなかった？私の事はいいから手紙に集中しなさい」

「ああ、そうだったな、んじゃあ、ちよつと休憩にするか」

「ええ、じゃあ、コーヒーでも入れるわ」

私はそれからキッチンに向かった。

私はコーヒーと昨日貰ったケーキの準備をしながら色々考えたの・・・

彼は今、彼女への手紙を書いている。これは私のアイディアよ。彼が、彼女に何かしてあげたいけど、何をしたらいいかって相談にきたから・・・

私ってバカよね、自分を追い詰める事になるって分かってても真剣に考えてあげるなんて

私は何がしたいのかしら？・・・

「はい、コーヒー、それとこれは昨日博士の知り合いから貰ったケーキよ」

「サンキュー」

工藤君はさっそくコーヒーに手をのばした。
そして一口飲むと今度はケーキも食べ始めた。

「ねえ、ちゃんと真面目に書きなさいよ。あなたが最初に何かした
いって言い出したんだから」

「書きなさい・・・か、お前っていつも命令口調だよな。自分を上
に見てるっていうか・・・」

「そっ、そう?・・・」

気が付かなかったわ・・・私って、そんなふうに話してるかしら・・・

・

「まっ、俺達からすれば小学生の子供なんて明らかに年下だし、け
ど、お前俺も年下に見てるだろ?・・・」

「えっ、・・・そんな事ないわ」

けど、そうだったかしら?・・・確かに工藤君は私からするとま
だまだ幼い感じはするけど

だって工藤君、クラスメイトと楽しくサッカーとかしてるし、彼女
の事を言うときすぐ赤くなるし・・・かなり子供っぽいところある
けど・・・

「なあ、お前って、本当はいくつなんだ？」

「いくつだと思っ？」

「20歳くらい、かな・・・」

「まあ、そういう事にしといて」

もともと自分の年を言う気なんてまったくないわ。そうね。少なくとも今は・・・

「それで？少しは進んだの、手紙」

~~~~~夕方~~~~~

「ふう・・・どう？これで」

私はそっと筆を置いた。

「ああ、完璧だ」

工藤君は笑って頷いてくれた。

「本当？・・・これ、出していいと思う？」

「まあ、細かいところを見れば、多少は、というか、山ほど気になるところがあるけど、お前ががんばったし、いいんじゃないか？」

「よかった・・・」

これもすべて工藤君のおかげね。

「工藤君、ありがとう・・・」

「感謝しろよ。俺がこの一週間ほぼ付きっ切りで教えてやったからな」

「ええ、で？あなたの方は？」

「これから手紙を入れに行く、お前のおかげで最高にいいものが出た。メールだけじゃ伝わらない事もあるし、蘭には心配かけさせてばかりだからな」

「そう・・・」

私はその手紙の内容を知らない。もしかしたら彼の本当の気持ちが書いてあるのかもしれない。

けど、私にそれを止める権利なんてない・・・

だから……

「きっと彼女も喜ぶわ。ほら早く行ってきなさい」

私は彼の背中を押してあげるの……

自分を苦しめるって分かってても、辛くなるって知ってても

私はどうしたいの？

私は……

彼に幸せになって欲しいの

「んじゃ、行ってくる・・・じゃあな」

彼は玄関に行き、そして、私の前から消えた。

—いっつていっつていっ—

### 第3話 手紙（後書き）

この小説の思い出は・・・特にありません、そこまでこれは真剣に書いてないです。けど、読んでくださった皆様には感謝してます。ありがとうございます。それと、今度こそしばらく小説を休みます。そもそも私が復帰したのは別の小説『テディベア』を終わらせるためだったので、とりあえず終わっただけ・・・では、いつか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8943b/>

---

習字のお時間！！

2010年10月9日12時52分発行